トーマス・マンの唯一の未完作『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』

――その特性とパロディー――

禿　憲　仁

マンの『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』（Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull）（以下、小論では『詐欺師クルル』と呼ぶ）を論ずるとき、その特性として、小論の標題にも示した通り、彼にとって唯一、未完の作に終ったということが最初にあげられる。つまり、この『詐欺師クルル』は三部構成で「回想録第一巻」（Der Memoiren erster Teil）という副題が添えられており、あくまで第一巻として出版され、全集にも収められているのである。未完に終った原因は初版が出た翌年、正確に言うと、一九五五年八月十二日に作者自身が永眠してしまったからであるが、その前年、マンはあるインタヴューに答えて「[1]これは四百四十数ページに及ぶ一巻で、〈回想録第一巻〉として九月に出版されることになっています。相変らず断片ですが、たとえ、私に更に四百四十ページを書き足す時間が与えられ、その気になったとしても、この奇妙な本は、多分まだ断片であり続けるでしょう。」といみじくもこの作品の運命を予感し、併せて、作品そのものの性格を分析している。そして、初版がでる直前には、ミュンヒェンのバイエルン美術工芸アカデミーの会長であるエミール・プレトーリウスに「[2]この冗談の続編は目下執筆中のような顔をしていますが、実際のところ、それ以降のことは一行も書いていません」（一九五四年九月六日付、書簡）と告げている。

また、八十歳を迎えんとする老作家マンは、この『詐欺師クルル』を「[3]馬鹿げた作品」と評し、彼としては、もっと年齢に相応しい仕事をしたいなどとこの作品をそれほど高く評価していないと思われるふしもある。以上のことからしても、単に作者自身の寿命という時間的制約ばかりでなく、この小説自らが有する性格と、この作品に対するマン自身の過少評価、それに伴う創作意欲にも、『詐欺師クルル』が未完に終らざるを得なかった原因があると言えるだろう。

ところが、一九五五年十月に第一巻が出版されるや否や、一ヶ月後には売り切れるという状態で、マン愛読者をはじめ、世の識者の間でも好評を博したという事実をここに付記しておく。

＊

第二に挙げられる特性として（第一巻）成立までの、四十年近い中断を含む、執筆と中断の繰り返しがある。つまり、『詐欺師クルル』は、作者マンの二度に亘る戦争体験や亡命などを背景にして、種々の紆余曲折を経て成立しているのである。そこで小論においてはこの四十年近い中断を一応の境として、便宜上、前期と後期に分けて論を進めていくことにする。

トーマス・マン研究所（Thomas Mann Archiv）の所長であるハンス・ヴィスリングは一九五七年九月三日発行のフランクフルト新聞（Nr. 203）に載ったマンの娘エーリカ・マンの報告を紹介して『詐欺師クルル』の構想が生まれた時期を定めている。エーリカはそこで「[4]〈クルル〉に関する私の父の計画は一九〇九年六月にまでさかのぼり、その時点で既に母に、この物語の成り行きを説明していました。」と語っている。

マン自身は『略伝』（Lebensabriß）のなかで、「[5]『大公殿下』（Königliche Hoheit）を書きあげた後、私は『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』を書きはじめていた」と回顧しているが、彼は『大公殿下』を一九〇九年二月十三日に完成しており、それから約一年後の一九一〇年一月十一日付、友人のクルト・マルテンス宛の書簡ではまだ「[6]私はいま、ずっと以前から計画を練っているまったく風変りな作品『詐欺師の告白』のために資料を集め、ノートを作り、研究しています。」と報告しているのである。また、H・ヴィスリングはマンの妻カーチャの母であるプリングスハイム教授夫人の日記を参考に、この年七月七日にマンが家族を前にして『詐欺師クルル』の冒頭部分を朗読した事実を明らかにしている。更にこの日記には、五月二十二日の時

点でマンがテオドール・レッシングに対する反論のため病的になっていると記載されている。それ故、『詐欺師クルル』の執筆は、おそらく五月末か、六月初旬頃に開始されたと解釈するのが妥当であろう。これ以前に、即ち、資料収集、ノート作成の時点で執筆が開始された可能性も残されているが、いずれにせよ、正確な日付が記されていたであろう当時の日記が現存しないいまとしては、あくまでこれらは推測の域を脱し得ないのである。

そして、翌一九一一年五月末から一週間ほどのヴェネツィア沖のリド島滞在と、友人グスタフ・マーラーの死が契機となって短編『ヴェニスに死す』(Der Tod in Venedig)の構想がかたまるや否や、マンはたちまちこれに取り組み、『詐欺師クルル』を中断してしまう。これが最初の中断である。中断の理由をマンは「[7]極めてデリケートなバランスを保つ離れ技ともいうべきこのクルルの回想録を長い時間保っていくことは、言うまでもなく困難な仕事であった。そして、この仕事を休みたいという願望が、他の作品の構想を産み出す手助けとなり、そのため一九一一年春には、クルルの回想録が中断されたのである。」（傍点、筆者）と後に説明している。マンの説明によると『ヴェニスに死す』のために、困難な仕事である『詐欺師クルル』が棚上げされ、以後四十年近く原稿が眠り続けたことになっている。これに対して、ヘルベルト・レーネルトは『ヴェニスに死す』と次作の長編『魔の山』(Der Zauberberg) 執筆開始までの、即ち、一九一二年七月から翌一三年七月までの一年間にもう一度『詐欺師クルル』に筆が加えられ、実際は、『魔の山』のために再び中断されたと主張している。その根拠として、彼はパウル・アマン宛の書簡を引用している。そこには、「[8]歴史関係、政治関係の文章を即興的に書いたことにより仕事が中断したこと。……しかも、〈魔の山〉自体が予定外に割り込んできたものなので、私は三分の一仕上がっていたある長編を中断しました。『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』というこの長編小説は……」（一九一五年八月三日付）と、『詐欺師クルル』が『魔の山』のために中断された事実が明記されている。H・ヴィスリングは更に具体的にこの事実を証明している。

つまり、『詐欺師クルル』第二部第一章 (Zweites Buch. Erstes Kapitel) の冒頭部分で「[9]長い間、この原稿は鍵をかけられた箱のなかで眠っていた。ゆうに一年間は……忠実に順を追って稿を重ね、告白を続けることができなかった。」とクルルが述べているが、これは作者自身の告白であり、「一年間」というのが、先述した『ヴェニスに死す』

から『魔の山』執筆までの「一年間」に合致するという訳である。その他にも、プリングスハイム教授夫人の日記（一九一三年二月二十二日）や、同年三月十二日付、ヴィトコプ宛のマンの書簡、更には、H・レーネルトと同じく、一九一五年八月三日付、P・アマン宛の書簡を証左にこの事実を裏付けている。しかも、彼はその内訳として、第二部第一章の他に、第二章にあたる宗教顧問官シャトー師とクルルの対話、第四章のフランクフルトでの数々のエピソード、そして、第五章の徴兵検査の場面がこの一年間に書き加えられたと説明している。

おそらく、H・ヴィスリングやH・レーネルトの指摘通り、一九一二年から一三年にかけて、マンはもう一度『詐欺師クルル』に筆を加えたに違いない。しかし、マンが単に記憶違いをしたのか、或いは、自己の作品の成立年代を単純化しようとして意図的にこの「一年間」を無視したのか、いずれとも判断しかねるのである。

その後『詐欺師クルル』は後述するようにマンの仕事計画に幾度か顔を出すことはあっても、実際に稿が重ねられることはなく、四十年近く眠り続けることになるのである。その間、断片の断片として発表されることがあったので、簡単にその経緯について触れておこう。

先ず、執筆開始の翌年、一九一一年には、S・フィッシャー社の創立二十五周年記念の年鑑に、「ある長編小説の断片」(Bruchstück aus einem Roman) という表題で掲載され、続いて、一九一九年には、「未完の長編小説『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』断片、〈学校ずる休み病 (Schulkrankheit)〉」の章が、そして、一九二二年には「幼年時代の書 (Buch der Kindheit)」という表題で第一部 (Erstes Buch) がリコラ社から出版されている。この「幼年時代の書」が出版された際、これはマンの最も成功した傑作だと高く評価されたが、マン自身はそのことに関して別に驚きもしなかったと後に表白している。

ところで、マンは一九三三年二月十一日にオランダへ講演旅行に出かけるが、その後ナチスが政権を支配したためドイツへ帰国出来なくなり、止むなくこの年の秋からチューリッヒ近郊のキュスナハトへ住むことになる。そして、三八年五月には、アメリカへ正式に入国するが、その前年の三七年に、マンの信捧者で、アムステルダムのクヴェリド社 (Querido Verlag) のドイツ部門を設立したランツホフ博士と交渉がまとまり、二二年に出版された第一部と、五章からなる第二部 (Zweites Buch) を加えた『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』が秋に出版されている。これを

一九七四年版の全集（全十三巻、S・フィッシャー出版）に収められている決定稿と比較してみると、小さな語句の書き変えは三十箇所足らずあるが、文章の書き変えは数えるほどしかない。その一つは、第一部第四章、主人公クルルの身体について述べられる下りで、彼の脚が比較的短かいのを名付親であるシンメルプレスターが慰めるが、決定稿ではこの部分は割愛されている。そして、この箇所を除けば、第二部第四章後半に書き変えが集中している。この第四章は、シャンパン醸造業者であった父親の自殺後、母親と共に移り住んだフランクフルトでのクルルの生活といくつかのエピソードを中心に展開される。そのエピソードの内容に書き変えが目立っているが、筋の運びに影響を及ぼすほどではないのでその違いを具体的に列挙することはここでは控えることにする。

また、この章の最後は「(この先二、三ページ分の原稿を紛失してしまった。)」(Hier fehlen einige Seiten des Manuskripts) という但し書きで結ばれ、奇妙な現実感を生み出しているが、実際は四章自体が未完成のまま出版されてしまったのであろう。もちろん、決定稿では加筆され、但し書きは姿を消し、完全な形で終っている。[10]

*

一九二六年十二月から一九四三年一月四日まで十六年以上にも及ぶ歳月をかけて、マンは旧約聖書創世紀を中軸に、さまざまな伝統、神話などを織り込んで、四部からなる長編大作『ヨゼフとその兄弟たち』(Joseph und seine Brüder) を亡命先のアメリカで完成させたが、その後二ケ月足らずで、即ち、同年三月十三日には早くも、モーゼの十戒を素材にした短編『掟』(Das Gesetz) を書き上げている。その翌々日にあたる三月十五日について彼は『ファウストゥス博士の成立』(Die Entstehung des Doktor Faustus) のなかで以下のように記している。「私が毎晩書き記す日誌のなかの、正確に言うと、三月十五日の欄に、《ファウスト博士》(Dr. Faust) という略字が、ほとんど脈絡もなく、突如として浮び上がってくるのである。即ち、〈《ファウスト博士》のための資料を求めて古い書物に眼を通す。〉と。」[11] この時点で彼は一九〇一年に、――後に、マンが文学的成功を収める基盤となった『ブッデンブローク家の人々』(Buddenbrooks) が出版された記念すべき年である――既に、たった三行ではあるが、その腹案が書き付けられていた『ファウストゥス博士』(Doktor Faustus) にとりかかろうとしたのである。がしかし、「この〈素材〉は物騒なもので、これに形を与えるためには、多大の心血を注がねばな[12]

らないという予感や、この素材の要求するところには、有無を言わせないような一種の過激さがあるという漠然とした想像に強められて、それに逆らう本態があったことは紛れもない事実である。」と、その素材に伴う困難さゆえに弱腰になり足踏みをしているのである。「[13]そこで、まず始めることのできるもの、ファウスト素材を相当延期させてくれる他のものとしては、第一次大戦前に寝かせたままの長編小説断片『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』を書き継いで完成することであった。」と後に、マンは当時を回想している。同時に、「[14]古い基礎の上に更に積み上げて（新しいものを築いて）いくことの長所」を見出した彼は三十年前に『魔の山』によって中断されていた『詐欺師クルル』のために再び準備を始める。ところが、ある日、マンが「[15]詐欺師とファウスト素材の間に内的親近性があることを認識した」ことから、彼の仕事計画はまたも意外な方へ進んでしまうのである。「[16]（つまり、後者〈ファウスト素材〉においては、悲劇的＝神秘的に、前者においては、滑稽で＝犯罪的に扱われる孤独というモティーフに基づく親近性である。）しかしながら、もしこれを造りあげる能力が私に備わっているとすれば、後者つまり、ファウスト素材の方がいまの私により適切で、時代に近い切実なものだと思われる。」と言明しているように、一度は『詐欺師クルル』に傾いた天秤が、結局は逆転して「ファウスト素材」の方に傾いてしまったのである。

そして、マンは一九四三年五月二十三日から一九四七年一月二十九日まで三年八ケ月を要して、架空の作曲家アードリアーン・レーヴァキューンの生涯を友人のツァイトブロームが回想するという形式で、現在と過去という二重の時間を功妙、かつ有機的に絡み合わせて物語を展開していくモンタージュ技法を用い、しかも、その素材を中世のファウスト民衆本に求めて長編『ファウストゥス博士』を書き上げる。この『ファウストゥス博士』成立の年、つまり、一九四七年四月二十二日から九月四日までマンはヨーロッパ旅行をするが、アメリカへ帰国後の十月十日、アグニス・E・マイヤーに当てて次のように報告している。「[17]比較的元気なときは、いくつかの仕事計画に心を動かされます。一つは、ある中世伝説による短編小説で、これは『すげかえられた首』、モーゼ物語とともに私の《トロア・コント》を形成しうる第三の作品です。一つは、フェーリクス・クルル断片を豪華な馬車が横行していた時代に演じられる現代的な悪漢小説に仕上げることです。」また、十一月二十五日には、「[18]フェーリクス・クルルの断片を私の老後の楽

しみのために本格的な悪漢小説に仕上げるというのはいかがでしょうか。」とヘッセに意見・感想を求めている。これに対して、ヘッセは「[19]『クルル』については何も言う必要はありません。あなたは、私がどれほどこの人物を愛しているか、とっくに御存知ですし、私がこれを読むことをどれほど楽しみにしているか、そればかりか、あなたにもっと長い時間この仕事にたずさわって欲しいと望んでいることは、御想像して頂けるでしょう……」（一九四七年十二月十二日付）と続編に対する期待をこめて極めて好意的に返答している、にも拘らず、ここでもマンの天秤は「中世伝説による短編小説」の方へ傾いてしまうのである。即ち、翌一九四八年一月二十一日に、中世のドイツ叙事詩人ハルトマン・フォン・アウエの『グレゴリウス』(Gregorius)を原典とした長編小説『選ばれし人』(Der Erwählte)に着手し、一九五〇年末にこれを完成している。そして、ようやく、一九五一年一月八日付、オットー・バスラー宛の書簡が証明しているように四十年近く中断していた『詐欺師クルル』に一度はとりかかるが、やがて、翌五二年五月十六日には『欺かれた女』(Die Betrogene) 執筆のためにまたしても中断している。そして、マンは五三年四月十一日になってやっと本格的に『詐欺師クルル』に取り組み、一九五四年の二月初旬頃に一応完成（三部まで）しているが、これも正確な日付はわからない。彼は、この年の二月四日からローマ・シチリアへ一ケ月ほどの小旅行をしているが、旅先のタオルミーナ（シチリア）から娘エーリカに当てた二月十五日付の礼状が一つの根拠となっている。この礼状というのは、マンがエーリカに『詐欺師クルル』の通読を依頼し、最初の断片と、四十年近い中断の後加筆された続稿との間に作者が見落している矛盾がないかどうかを確認してもらったことに対する礼状である。エーリッヒ・ヘラーは「[20]このフモールに満ちた素材が、フモール不在の一九一一年から一九五四年までの間にこうむったであろう傷を考えるなら、これは文学史が提示しうる、傷口を縫い目もわからぬほどに完治した最も驚くべき症例の一つである。」と、マンのフモールの一貫性、及び彼の縫合技術を賞賛している。

やがて、三月にチューリッヒ＝エルレンバッハに戻ったマンはエーリカの進言を受け入れ、第三部第二章全体を書き変えている。その後、校正が重ねられ、この年、即ち、一九五四年十月半ばに、S・フィッシャーから、三部より成る『詐欺師フェーリクス・クルルの告白、回想録第一巻』が出版されたのである。

＊

『詐欺師クルル』の成立概観は大体以上のようであるが、マンはこの小説の構想が生まれたきっかけについて、「[21]この一風変った構想は多くの人が推測した通り、マノレスクの回想録を読んで思いついたものである。」と自ら表白している。マノレスクというのは、ルーマニアの実在の詐欺師で、その回想録が一九〇五年に出版されている。マンの初期短編『トーニオ・クレーガー』のなかで、主人公トーニオをして「[22]私はある銀行家を知っています。彼は白髪頭の実務家で、小説を書く才能をもっているんです。……この男が自分の才能を自覚したのは実際、刑務所に入っている時なんです。そして、彼の囚人としての経験が、彼の作品全体の根本主題になっています。即ち、少し大胆かも知れませんが、詩人になるためには、何か刑務所みたいなものに通じている必要があると言えるのではありませんか。」と、詩人（芸術家）と犯罪（者）との間に密接な繋がりがあることを暗示させたマンが、詐欺師の回想録に興味を覚えたのは当然のことであったろう。この芸術家の才能・本性と犯罪（盗癖）のモティーフは『詐欺師クルル』の第一部第四章、シンメルプレスターのフィディアスの話にも登場している。結局、マンは『詐欺師クルル』を一種の芸術家小説として位置づけ、彼の青春時代を象徴する「芸術（家）」と「生」の葛藤を伏線にして、マノレスクの回想録をパロディー化したのである。つまり、仮面とか変装のように外的な面に留まらず、内的・精神的にも他の人間になりかわる（演ずる）というクルルの「詐欺（術）」そのものが「芸術」であり、彼はこれを武器に「（市民的）生」とわたり合い、手玉にとるのである。

マンの作品中、明らかにパロディーとして書かれたものは先述した通り、『ヨゼフとその兄弟たち』、『掟』、『ファウストゥス博士』、『すげかえられた首』、それに『選ばれし人』などが挙げられる。これらのうち『ヨゼフとその兄弟たち』が一九二六年、即ちマンが五十一歳のときに書きはじめられており、他のパロディー作品はこれ以降のものである。換言するとマンの場合、壮年期から晩年にかけてパロディー化の傾向が顕著になってくるのである。この意味において、一九一〇年、マンが三十五歳のときに執筆が開始された『詐欺師クルル』は、彼のパロディー作品の先駆けといえるだろう。

ここで語源的にギリシア語の《παρῳδία》に相当するパロディー（Parodie）の定義が問題となるが、一般に狭義のパロディーは、まじめな原典の形式要素は保持しながら、

それに相応しくない表現方法を用いたり、内容自体を変えてしまうことによって生ずる滑稽さを狙った一種の模倣とされているようである。厳密には、これに類似するものとして、トラヴェスティー（Travestie）――つまり、狭義のパロディーとは形式と内容の模倣の仕方が逆で、まじめな原典の内容は保持しながら、それに相応しくない形式で包み込んでしまうことによって、滑稽さを生みだす――があるが、まじめな原典の模倣・もじりである点、効果として滑稽さを狙っている点で共通しており、広義ではトラヴェスティーも含めてパロディーとして理解されている。小論においても、トラヴェスティーを含む広義のパロディーの意で論を進めていることをここで明記しておく必要があるかと思われる。

パロディーについて『ワイマールのロッテ』（Lotte in Weimar）の第七章で老ゲーテが次のように規定している。[22]「パロディー……私はパロディーについて思いめぐらすのが一番好きである。……パロディーとは敬虔な気持で行う破壊、ほほえみながら告げる別れだ……古いものを維持して模倣することだが、その模倣は早くも冗談になり、誹謗になっている。」

更に、「[23]文化とはパロディーである。……愛にしてパロディーなのである。」と。老ゲーテの口を借りてはいるが、ここにマン自身のパロディー観が打ち出されているのである。一般にいわれるパロディーとは、原典の模倣による解体と理解されているが、マンにおいては、その解体の際に、敬虔なる気持と、原典に寄せる愛が伴う反面、「冗談」（Scherz）という語に窺われるようにイローニッシュな遊びの要素や、「誹謗」（Schimpf）という語が表わしているように批判的姿勢が同居しているのである。

それ故、このパラドックスを孕んだマンのパロディーは、彼の初期作品にみられるイロニー、つまり、「愛ゆえの批判」、「創造のための破壊」と定義づけられるであろうエローティッシェ・イロニーと一脈通じているのではないだろうか。

また既述したように、一九二二年、『詐欺師クルル』の断片の断片として『幼年時代の書』が発表されたが、マンは後に、[24]「……これは、私の伝統に対する関係を描いたものであり、この関係は愛に満ちたものであると同時に解体力のあるもので私の作家としての〈使命（Sendung）〉を規定している。」と回顧している。これは『詐欺師クルル』がマンの伝統に対する関係、即ち「文化とはパロディーである。」という文化観のもとに生まれたパロディーであると

いうことだけでなく、彼にとっては、パロディーが単なる創作上の一技法に留まらず、彼の作家としての存在そのものを左右するほど意義深いものであるということを明白に物語っている。また、パロディーと文体について、マンは「文体の領域では私は実はもうパロディーしか知らない。」[26]（『ファウストゥス博士の成立』）と記しているが、次に『詐欺師クルル』の文体面からパロディーを考察してみよう。一般にマンの小説技法として〈Erzähler〉（語り手）、或いは「物語の精神」の存在が挙げられ、しばしば言及されてきている。即ち、物語が語り手を通して進められるので、そこにゲーテが言う芸術的客観性、客観的距離が生ずる。マンの作品には、可視的にせよ、不可視的にせよほとんど語り手が登場しているが、この点においても『詐欺師クルル』は異彩を放っている、というのも、主人公クルルが自己の生い立ちから、ルクセンブルクの貴族、ルイ・ド・ヴェノスタ侯爵になりすましてリスボンのクックック教授のもとへ身を寄せるまでの体験を様々な女性遍歴を織り混ぜながら自ら回想・告白するという、いわゆる私小説（Ich Roman）の形式――語り手がそのまま主人公である――をとっているからである。一八九七年九月、『ノイエ・ドイッチェ・ルントンシャウ』（Neue Deutsche Rundschau）に発表された短編小説『道化者』（Bajazzo）を除いては、マンの場合、この私小説の形式をとっている作品はほとんどないと言える。彼自身「文体的に、私を魅了したものは、私が手本にした粗雑な回想録が示してくれた、まだ一度も試みたことのなかった自叙伝風の直接法である。そして、好んで用いられてきた伝承の一要素、つまり、ゲーテ的な自己形成的自叙伝的なもの、それに貴族的で告白的なものを、犯罪的なものに翻訳するというパロディー的観念から、ある幻想的、精神的な魅力が生じた。実際、この観念が偉大な喜劇の源泉なのである……。」[27]と、マノレスクの回想録が、彼のパロディー感覚を刺激したのは、その内容もさることながら、その自叙伝風の直接法の文体と、ゲーテの自伝『詩と真実』を「詐欺師クルルの詩と真実」に置き変えるというフモールに満ちた着想だったのである。これは、一九一五年八月三日付、パウル・アマン宛の書簡、『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』は……あの偉大な自伝『詩と真実』のカリカチュアであり、文体自体も、これをパロディー化したものである。」[28]というマンの説明にも明らかである。

結局、マンは、内容面において、ともすれば大衆、通俗小説に堕する危険を孕みながらマノレスクの回想録をパロディー化し――もっともマン自身の個人的体験を挿入して

いる部分もかなり見受けられるが――、文体面では、ゲーテの『詩と真実』を手本にしてパロディー化するという、いわば、綱渡り的バランスを要する二重のパロディーを駆使することによって喜劇的パロディー『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』を書き上げたのである。

既述したように、マンは、『詐欺師クルル』の前に、ハルトマン・フォン・アウエの『グレゴリウス』をパロディー化した『選ばれし人』を完成しているが、罪と恩寵をモティーフにした原典の宗教的基本理念は保持しながら、彼はこれを洪笑を誘うほどフモールに満ちた作品に仕上げている。孤独な芸術家（作曲家）の悲劇を素材とする長編小説『ファウストゥス博士』を書き上げた後、[29]「滑稽なもの、笑い、フモールといったものが次第に私には魂の救済であるように思えてきたのです。」と告白したマンが、次作『選ばれし人』、更に『詐欺師クルル』をフモールに満ちた喜劇的パロディーに仕上げたのは当然のことと言える。視点を変えるなら、波瀾に満ちた人生を送ったフモリスト、マンは最終的に『詐欺師クルル』に安息の地を求めるよう定められていたのかも知れない。

Text, Thomas Mann: Gesammelte Werke in 13 Bänden. Frankfult a. M. (S. Fischer) 1974

（註）のローマ数字はその巻数を示す。

註

① 後に、このインタヴューの内容が『帰還』(Rückkehr) と題され、一九五六年版、全集に収められた。
② An Emil Preetorius. 6. Sept. 1954.
③ ibid.
④ Thomas-Mann-Studien I (Franke) s. 238.
⑤ Bd. XI. S. 122.
⑥ An Kurt Martens. 11. Jan. 1910.
⑦ Bd. XI. S. 123.
⑧ An Paul Amann, 3. Aug. 1915.
⑨ Bd. VII. S. 322.
⑩ THOMAS MANN, Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull. 1937 (Querido Verlag) S. 140.
⑪ Bd. XI. S. 155.
⑫ ibid. S. 157.
⑬ ibid. S. 157.
⑭ ibid. S. 158.
⑮ ibid. S. 159.
⑯ ibid. S. 159-160.
⑰ An Agnes E. Meyer, 10. Okt. 1947.
⑱ An Hermann Hesse, 25. Nov. 1947. (H. Hesse-Th. Mann Briefwechsel, Suhrkamp).
⑲ An Thomas Mann, 12. Dez. 1947. (ibid.).

㉛ Erich Heller; Thomas Mann. Der ironische Deutsche. (Suhrkamp), S. 335.

㉜ Bd. XI. S. 122.

㉝ Bd. VIII. S. 298.

㉞ Bd. II. S. 680.

㉟ ibid. S. 622.

㊱ Bd. XI. S. 122–123.

㊲ ibid. S. 180.

㊳ ibid. S. 122.

㊴ An Paul Amann, 3. Aug. 1915.

㊵ An Agnes E. Meyer, 10. Okt· 1947.

(本学助手　ドイツ文学)